

遺跡に残る大洪水の跡

三田谷 I 遺跡 出雲市 1997 年（平成 9 年）熱田貴保

平成 9 年の春、出雲市上塩冶町の三田谷（さんただに）という場所で調査をはじめた私は、奇妙な地形の上に遺跡が存在することが気になっていました。そして調査が進むにつれ、この遺跡に出雲平野の成り立ちに関わるある重要な事実が隠されていることを知り、自然の脅威に戦慄を覚えることになったのです。

遺跡は、神戸川と平野を見下ろす丘陵地の、細長い谷の中にありました。一般的に谷地形の遺跡では地下水が豊富なので、湿潤な環境にあります。しかし、ここでは白く粗い砂が幅 120m にわたって谷を塞ぐように堆積し、水はけの良い台地のような地形をつくり出していたのです。高燥な台地の上は生活に適しており、縄文時代の終わりごろから連綿と人が住み続けたことが調査で明らかになりました。

それでは、このような地形を生み出した大量の砂は、いったいどこからもたらされたのでしょうか。謎の砂の正体、それは約 3700 年前（縄文時代後期）に三瓶山が噴火した際の軽石だったことが、発掘と併行して行われた地質調査で判明したのです。

三瓶山は縄文時代に 3 回大きな噴火をしており、そのたびに大量の噴出物が降り積もったことが、板屋（いたや）Ⅲ遺跡（飯南町志津見）などの調査で確認されています。堆積した火山灰と軽石は、やがて大規模な土石流となって神戸川を下り、山間の出口付近にあった三田谷を巨大なかたまりとなって呑み込みました。水が引いたあとには粒となった軽石が厚さ 5 メートル以上も堆積し、その結果、谷の中に台地のような地形が生まれたのです。調査当時、私はそのすさまじい濁流を想像し、遺跡の上に立ち尽くしたことを今でも記憶しています。

三瓶山の火山活動を物語るものとして「三瓶小豆原（あずきはら）埋没林」があります。ここでは縄文時代の巨木群を目の当たりにできますが、三田谷 I 遺跡でも同じ時期の埋没林が見つかりました。台地の後背に溜まった火山灰を掘り下げたところ、ヤナギやムクノキが現れました。（写真）ヤナギは水辺を好む植物で、火山が噴火する以前には、谷特有の湿った環境



火山灰に埋もれるヤナギの幹

だったことがうかがえました。

神戸川下流の平野には弥生時代になると多くの集落が出現します。これらが立地する地形も三瓶山の軽石が堆積してできていることが、古志本郷（こしほんごう）遺跡（出雲市古志町）の調査で確認されています。火山活動とその後の大洪水は、縄文人にとって大きな脅威だったと思われませんが、平野の原形をつくり出し、弥生人が稲作を営むための新たな舞台を準備することになったのです。

（島根県埋蔵文化財調査センター 所長）

ひとくち情報：縄文時代の巨木群の天然記念物「三瓶小豆原埋没林」は「さんべ縄文の森ミュージアム」で見学可能です。